



理事会だより (11・10)

一、部会報告 総務部：元名誉会員野村浜生さん逝去
(百歳) に対し規定により弔慰金。広報部：年間一
句のお願い。

二、立春句会(2月4日)の概要(事業部)発表、詳細
は本号6頁。

三、秋の吟行会(11月8日大磯城山公園郷土資料館)
の実施・会計報告(広報部 本号4頁)

四、桜まつりの兼題等、桜まつり当日の役割分担は12
月理事会にて決定する(事業部 総務部)。

五、会長より、秋季大会の類似句問題につき11月理事
会以降の経過報告があり、当該作者に今後の適切な
対応を梅まつり案内に添え事業部長名で通知したこ
と、これを以て結了としたとの提案があり、各理
事意見開陳の上全員一致で了解した。なお、桜まつ
り募集文言の見直しを検討することになった。

「俳句おだわら」10句抄(663号より)

杉山あけみ 抄出

| | |
|------------------|--------|
| ひよっとして悪女なかもダリア咲く | 内田知江子 |
| ふんはりとかき氷毒舌がぐさり | 長谷川きよ志 |
| 鬼百合や何と明るく元氣な子 | 小瀬村信子 |
| 風鈴の次の音まつひとりの夜 | 久保寺トミ子 |
| 沈む夕日今真つ直ぐに秋の海 | 柳澤ミサ子 |
| 梨なのに小粋な名前長十郎 | 岩本ひさみ |
| 二百十日地球にもある不整脈 | 伊藤 道郎 |
| 父性とは十六夜の白き灯台 | 岡本 史郎 |
| 朝冷えの血管針を逃けたがる | 小澤 園子 |
| 端とか隅とかが好きで九月かな | 瀬戸 正洋 |

山田照子 抄出

| | |
|------------------|-------|
| 入相に忽と消えたる赤とんぼ | 陌間みどり |
| ひよっとして悪女なかもダリア咲く | 内田知江子 |
| 沈む足抜き出し一步稗を抜く | 高井 幸子 |
| 阿波踊蹴出しの波の押し寄する | 齊藤 桂 |
| 肢持てば機織はたを織りにけり | 守屋 まち |
| 梨なのに小粋な名前長十郎 | 岩本ひさみ |
| 二百十日地球にもある不整脈 | 伊藤 道郎 |
| 父性とは十六夜の白き灯台 | 岡本 史郎 |
| 飛ばし読む葉の処方鳳仙花 | 竹下由里子 |
| 朝冷えの血管針を逃けたがる | 小澤 園子 |

■10月号(663号)「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出(1)

夏果てて

青木たけを

夏休み一行日記を残すのみ

岡田 典代

宿題・課題は皆終わった。さてコロナ禍夏休みは楽しかったかな。満足だったと思う恵まれた子なんかほとんどいない。大人の事情でなんとなく未消化に終わってしまったと思う子が多いのでは。日記を読めば窺い知れるところだが、一行日記では僅かに5W1Hを記録するだけか。それもまた寂しい。

葛の花内山抑留所の外国人墓碑

岡本 史郎

今も各地で戦争の爪痕や歴史跡の存在が確認される。学校教育は何故か近・現代史に消極的と言われるが、作者は著名度が低いものでも積極的に郷土俳句の句材として取り上げ、地域で忘れてはならない戦争の記憶として句に留めようとしている。その真摯な姿勢が好ましく期待したい。

終りなきコロナと蟻を見つめをり

神山つとむ

国は事に当たって「慎重に注視する」のが好きで危機対応に遅れ、適切な対策を打てず国民に規制と我慢

■10月号(663号)「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出(2)

愛とやさしさ

足立 和子

身に入むや珈琲依存症かも知れぬ

瀬戸 正洋

俳句とは何か。巡り巡り合う季節の挨拶と考えている。凌ぎやすい秋、芸術祭、収穫祭、体育祭等々、血気盛んな秋。反面秋も深まりゆくと身心共に寒さも感じ、哀れさ淋しさも起きる。そんな瞬間、一杯の珈琲で自分を癒す。珈琲の数が増えることに心の模様が增える。この心の模様が俳句の詩の真実まことと思っている。珈琲の味が優しさに変わるのではなからうか。

馬の目の映す連山秋高し

瀬戸 りん

空は高く、海よりも深い秋の天。草原に馬の親子が連れ立つ。澄み切った秋の空間。四方に展がる嶺々の美しさが目に染みる。馬の目は素直に景を受け入れる。まるで嶺々と馬との語らいが風に乗って聴こえて来る様な気がする。「馬の目の映す連山……」が澄み切った秋の本意を十分に捉えている。すがすがしい句である。

糸瓜揺れやはき光の保健室

畠 梅乃

走る子、笑う子、歌う子と静まり返った学校に子供

を、医療関係者には我慢と犠牲的努力を強いた。したたかなコロナは衰えては姿を変えて盛り返しコロナとの戦いに疲れた医師は忸怩たる思いでどこまでも続く長い蟻の列を眺めるのみ。もうしばらく頑張つて頂きたい。

軍港は常の静けさ芙蓉咲く

齊藤 桂

軍港が静けさを維持しているのは喜ばしいこと。昔旅行で京都の舞鶴軍港を近くで眺めたが、真つ黒で大きな軍艦の威容は不気味で近寄りたかつた。この軍艦に永久に活躍の時が来ないことを祈つたのを覚えていた。今年ウクライナでロシアのシンボルと言われた巡洋艦「モスクワ」が沈没した。

背中から真つ逆さまに秋の暮
舌になぞる口内炎や原爆忌
黒葡萄ダミアに雨の音まじる
風となり光りとなりし花芒

瀬戸 正洋
瀬戸 りん
畠 梅乃
中村 昌男

理事会日程（各月第二木曜日）

1 / 12（18時） 2 / 9（15時）

1月12日は会場の都合で18時開催につき注意。

の声が活気づく。長い長い夏休み、日焼顔した元気な子、成長顔した逞しさ。保健室には子に寄り添う先生のやさしい笑顔が見えている。窓の外には糸瓜棚、やさしい風が吹いている。元気になれ、と先生が笑顔で優しく介護する。「やはき光の保健室」に先生の愛とやさしさがあふれていることが強く感じられ、あたたかい。

蓑虫や寂しき時は風を呼ぶ

中村 昌男

荒木とよひさの「四季」という詩がある。この歌に秋を愛する人は考えが深く心が深いと、歌われている。蓑虫は木の葉や小枝を綴り合せ、秋を満喫し棲息する。何の奢りもなく、風を呼び、風を呼んで揺れている。揺れた姿に風情が感じられる。この蓑虫の生きる姿にこそ、詩の真実まことがあると感じている。蓑虫の自然の中での銜のない生きる姿に哀れみとやさしさを感ずる句である。

夏休み一行日記を残すのみ

岡田 典代

招魂碑白露そつと玉結ぶ

岡本 史郎

秋風のふつと連れ去るコロナなれ

神山つとむ

かなかなの森深うして神近き

齊藤 桂

秋の吟行会（大磯）

十一月八日立冬翌日、快晴のもと大磯郷土資料館で開催。参加者は21名と少なめだったが、汗ばむような陽気の中を楽しんだ。3句出句3句選で各自披露、特選句について短評を述べあった。最後に佃名譽会長、池田会長に講評頂き、参加賞のクッキーを手に散会した。また新井顧問からご提供の銀杏を上位のお二人に差し上げた。（担当 広報部）。

（高点句 三点まで）

深閑と泡立草が攻めて来る

内田知江子

こゆるぎのかなたは干戈冬に入る

佐々木重満

踏みしめる音の変はりて落葉道

須田 聡子

こよろぎの風の息聴く冬紅葉

近藤 久江

（以下グループ順 自選句）

小春日やこよろぎ浜の風透けて

田中 幸子

紅葉且つ散るアメリカを向く吉田像

小野 菊土

アメリカへ向く銅像や鳥渡る

中村 昌男

小春日や一枚脱いだ展望台

石井千代子

しばらくは雲をあみだの小春富士

池田 忠山

紅葉初むおとおんなを明らかに

佃 悦夫

宰相の書斎より富士木守柿

小林 環

冬日差し七賢堂を照らしけり

齊藤 桂

波際に捲るジーパン冬麗
川尻の水の澱みや小六月
あをばとの幻影正と冬怒濤
冬菊の五鉢整然^{まき}昼^ま開くる
横穴古墳は胎蔵界で石路かつ黄
紅葉かつ散るはるかなる海の綺羅^{まき}
階は老の筋トレ冬に入る
海小春まなこ遙かに吉田像
大楠の裾のあかるし石路の花

須田 晴美
芹澤 常子
田下 昌人
村場 十五
寶子 山京子
伊藤はる子
長谷川きよ志
木村 幸枝
山田 照子

新作5句

岩本ひさみ

老いて行く我の心に冬の虹
黄色より赤に色変え実千両
日溜りを独り占めして水仙花
子の髪に白きが混じり寒き朝
ゆつくりと一歩一歩と冬の坂

* * *

第45回笛まつり俳句大会兼題入賞作品

兼題「笛・道」「桔梗」（みなみ俳句協会）

南足柄市長賞

朝市や雫ごと買ふ鉢桔梗

南足柄市議会議長賞

秋天を使ひ切つたる鼓笛隊

南足柄市教育長賞

花野行く絵本の中へ続く道

四位以下十七位

夕暮れの風を放さぬ白桔梗

海峡を行き交う霧笛島の宿

新涼や笛の司の白袴

赤とんぼ追つた日今は杖の道

影もまた風とたわむる群桔梗

白桔梗折り目正しきお礼状

板敷の僧の正座や白桔梗

宇宙への道を探ってゴーヤ蔓

迷わねば来る径でなし通草の実

桔梗咲くこの地の他は知らず老う

道問ふに案山子ばかりの地なりけり

廃絶の道は厳しき広島忌

白桔梗一りんざしの始発駅

来た道も行く道もなほ残暑かな

長谷川きよ志

北村 文江

荒 理依子

田中 幸子

黒元 勇

斉藤 静

田畑ヒロ子

中村 昌男

加藤かほる

伊藤あつ子

加藤かほる

豊田 幸枝

黒元 勇

高橋 俊彦

濱家 一志

斉藤 静

野島 巧休

新作5句

片野 節子

初冠雪湯気立つものに思ひ入る
騒然の世や咲きまどふ実千両
物言はぬ唇渴き冬薔薇
マスクして見えぬ敵と長丁場
夕映えや障子二枚の薄化粧

加藤れい子

走り根は走り放題神無月
秋明菊湯沸かしの笛鳴り止まぬ
旧道やバツタの好きな草ばかり
分け合うて病む人と食むマスカット
虫集く小さき書棚に本を詰め

小林永以子

秋霖や寄り添ふ千の水子像
浮あは子うほず高く秋霖の船溜り
秋霖やテトラポッドの間に猫
燐寸のぐずる秋霖の子の墓前
秋霖や捨て自転車のリムの錆

小宮 早苗

忘れたき事は忘れず花茗荷
白杖のふと止りたり金木犀
酔芙蓉刻の流れに移る色
撫子に乙女心を取り戻し
聞き役といふこと苦手大花野

写真捨てコンパスを捨て林檎食む

竹下由里子

◆みなみ(10・15)

かほる報

玉入れは空のポケット運動会

加藤 健治

天高し庭師の開ける空がある

市川めぐみ

ばった追うこんな処に忘れ鎌

豊田 幸枝

玉入れの声の湧き立つ運動会

斉藤 静

野鳥飛ぶ先に柿の実たわわなり

小瀬村信子

草薙ひと夜ゆだねる蝨斯

加藤 富江

秋明菊湯沸かしの笛鳴り止まぬ

加藤れい子

子に童話読み聞かす夜の虫時雨

加藤かほる

同胞はづからの集ふひと日やみかん山

幸子報

柚山の散策が好き草の花

大塚 行人

半生を寺に仕えて冬至粥

湯本とし子

鈴虫の声と気づきて鋏をとめ

加藤まり子

なかなかに通らぬ糸やそぞろ寒

久保寺トミ子

バス停は里の躰みなり草紅葉

田中 幸子

◆おほる(11・9)

秀泰報

おちこちに発火しそوناナカマド

石井千代子

落葉舞う自分らしさを染め上げて

廣田 悦子

校庭の子らと遊ぶや舞い落葉

二上 光子

入り日差す湖面を分かつ片時雨
落葉舞う空き地無声映画のごと
少年の夢押し上げて冬の月

横塚 昌平
高橋みどり
中根登美子

ふり返ることも人生返り花

中村 昌男

月蝕を観ては炬燵に夫の夜

石井きよ子

散る落葉音符となつて舞いあがる

香川 花子

いやされる友の笑顔とふかし芋

瀬戸とみ子

行く秋や宇宙の神秘大団円

加藤 春江

菊人形お城と供に晴ればれと

坂入清四郎

この先はホスピス棟や蔦紅葉

小野 菊土

口喧嘩する妻が居て冬薔薇

中津川晴江

太陽の恵みは深し冬の朝

風間 秀泰

◆鷹(11・5)

十五報

新蕎麦や三和土に置ける椅子雑多

青木 孝子

厨事終へ柅の香を利きに

池田 令子

隣家の音なき暮らし秋闌けぬ

西賀 久實

下流へと月の堤の歩を返す

佐宗 欣二

秋光や遊覧船の万国旗

須田 晴美

無聊なるひねもす地雨秋寒し

中田 笑子

百均のさぼてんの棘秋晴るる

百川 秀子

母の背の望外広し十三夜

山崎美知子

俳句おだわら（11・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（10・28） 久江報

千仏人形こゑなきこゑを秋のこゑ 足立 和子

老農の孤高脱穀の音高し 川本 育子

無駄花のなき律儀さや秋なすび 高橋 小糸

狗尾草杖の先にて吹かれをり 山崎 悦子

己が道自問自答の夜長かな 近藤 久江

◆たけのこ（11・2） 悦女報

折り取りて活ける楽しさ草の花 三木 泰子

ふともらす言の重さや赤のまま 小宮 早苗

かさこそと踏みたためらふや銀杏黄葉 徳田 公子

トンネルを抜けて秋めく海の色 久津間百合子

去年デビュー今年堂々稲刈機 宮崎 悦女

◆春野（10・16） きよ志報

巡礼の先達なして雪ばんば 秋山 昇

秋深し墓前に屯する鴉 伊藤はる子

捻り出す俳句と予算夜長し 内田知江子

身に入むや作り笑ひの車椅子 尾崎 一夫

眠る兎のいまは天使よつくつくし 瀬戸 悠

衣被いくつも食うて聞き役に 二見 和江

◆香雨・梅ごち（10・23） 忠山報

「おでん祭り」に並び怠ける最後尾 長谷川きよ志

ゴンドラを降りてたちまち花野なか 肥後ちさこ

父からの一行メール流れ星 関戸わよこ

新米やまづ塩のみのにぎりめし 青山 典子

いつになく箸の止まらぬ栗ご飯 門松 鳳文

こだはりの珈琲たてて秋惜しむ 吉田 百代

かばかりの風にもこぼれ萩の花 吉田 康雄

行く秋や上枝に赤き実のひとつ 陌間みどり

華やかに咲くも淋しき泡立草 小澤 純子

みづうみを仮の褥に渡り鳥 池田 忠山

◆こよろぎ（11・10） つとむ報

モンゴルの岩塩パラリ秋刀魚焼く 板谷 雅泉

一軒の雑貨屋たたむ柿の秋 植松テル子

剃刀の頬なめらかに秋の朝 神山つとむ

◆山北（10・27） 由里子報

晩秋や路地の奥より我が家の灯 和田恵美子

十五夜や古典臨書の筆をおく 尾崎 幸子

そういえば恋だつたかも草の花 中山 妙子

気をつける発火しそうな烏瓜 尾崎 竹詩

稲を刈る女二人の笑い声 石田加津子

写真捨てコンパスを捨て林檎食む

竹下由里子

◆みなみ(10・15)

かほる報

玉入れは空のポケット運動会

加藤 健治

天高し庭師の開ける空がある

市川めぐみ

ばった追うこんな処に忘れ鎌

豊田 幸枝

玉入れの声の湧き立つ運動会

斉藤 静

野鳥飛ぶ先に柿の実たわわなり

小瀬村信子

草薙ひと夜ゆだねる蝨斯

加藤 富江

秋明菊湯沸かしの笛鳴り止まぬ

加藤れい子

子に童話読み聞かす夜の虫時雨

加藤かほる

同胞はづからの集ふひと日やみかん山

幸子報

柚山の散策が好き草の花

大塚 行人

半生を寺に仕えて冬至粥

湯本とし子

鈴虫の声と気づきて鋏をとめ

加藤まり子

なかなかに通らぬ糸やそぞろ寒

久保寺トミ子

バス停は里の躰みせなり草紅葉

田中 幸子

◆おほる(11・9)

秀泰報

おちこちに発火しそوناナカマド

石井千代子

落葉舞う自分らしさを染め上げて

廣田 悦子

校庭の子らと遊ぶや舞い落葉

二上 光子

入り日差す湖面を分かつ片時雨

横塚 昌平

落葉舞う空き地無声映画のごと

高橋みどり

少年の夢押し上げて冬の月

中根登美子

ふり返ることも人生返り花

中村 昌男

月蝕を観ては炬燵に夫の夜

石井きよ子

散る落葉音符となつて舞いあがる

香川 花子

いやされる友の笑顔とふかし芋

瀬戸とみ子

行く秋や宇宙の神秘大団円

加藤 春江

菊人形お城と供に晴ればれと

坂入清四郎

この先はホスピス棟や蔦紅葉

小野 菊土

口喧嘩する妻が居て冬薔薇

中津川晴江

太陽の恵みは深し冬の朝

風間 秀泰

新蕎麦や三和土に置ける椅子雑多

十五報

青木 孝子

厨事終へ柅の香を利きに

池田 令子

隣家の音なき暮らし秋闌けぬ

西賀 久實

下流へと月の堤の歩を返す

佐宗 欣二

秋光や遊覧船の万国旗

須田 晴美

無聊なるひねもす地雨秋寒し

中田 笑子

百均のさぼてんの棘秋晴るる

百川 秀子

母の背の望外広し十三夜

山崎美知子

年下の教師に学ぶ夜学かな
 刈り終えて家族のための稲架一つ
 戸隠の闇の厚さや走り蕎麦
 お針子の赤き針山小鳥来る
 照返す蔵の家紋や小鳥来る
 落柿舎の縁に掛くるや添水鳴る
 身に入むや柱に残る煙草の香
 爪皮を付けし草履や秋の雨
 爪音の夕べの小路酔芙蓉
 駅蕎麦に海老天奢る日短
 先生も交じるりレーや天高し
 秋晴や形見かたみの着物伸子張り
 用水へ伸びし一枝や柿たわわ
 最終の都電を待つや後の月
 待宵や遠き囃子に耳澄ます
 靑空に飛行機雲や七五三
 風呂吹や缶から摺む削り節
 蒼天へダムの轟音冬紅葉
 冬ざれや湖畔の宿にジャズ流る
 天心の蝕のをはりし冬の月
 風波の湖に光や落葉踏む

柏木 良花
 庄司 下載
 瀬戸 りん
 高橋久美子
 中山智津子
 齊藤 桂
 芹澤 常子
 大木 敬子
 大島美恵子
 田下 昌人
 中根 和子
 加藤 幾代
 守屋 まち
 米山 翠
 來田 新子
 大沢 年子
 片野 秋子
 小林 環
 下平 美子
 杉崎 せつ
 鳥海 壮六

一輪の野の花愛づる小春かな
 かまいたち怖い上司が夢に現れ
 ◆実のり(11・17)
 たか志報
 古屋 徳男
 村場 十五
 岸本ひさみ
 杉本 久子
 木村 幸枝
 新井たか志
 史郎報
 青木たけを
 伊藤 道郎
 井上 良子
 川合 昌子
 木村 和彦
 佐藤 正子
 中村 裕子
 野川木一路
 岡本 史郎
 寶子山報
 若村 京子
 柳澤ミサ子
 田中 恵一
 葱畑のつんつん広し川の風
 ◆零(11・17)
 史郎報
 マスクしろ外せ原発再利用
 痩せサンマ海に居場所のなかりけれ
 行く秋や訪ねていけぬ父母の墓
 庭先の小菊今年も美しくしてうらわ
 抑留の父向日葵の大地を見たか
 残る蚊や落武者のごとささやきし
 行く秋の海に落ちゆく夕陽かな
 行く秋や最上の舟歌風に消ゆ
 赤い羽根人生に再演なけれ
 ◆沈丁(11・17)
 寶子山報
 秋刀魚焼く匂ひ三軒先を行く
 一病が疼き出したり寒の入り
 放牧の馬の親子や日脚伸ぶ

ごみ出しの朝もうれしい日脚伸ぶ

河本 純子

神官の野良着バッチリ柿たわわ

北村 文江

山寺の山に混じりて冬に入る

瀧本 敦子

テープの経朗々と寺天高し

木村美千代

単線の次の駅見る日脚伸ぶ

勝木 澄子

路地深く行き場失ふ秋の風

出澤 洋子

日脚伸ぶ電柱までのとびつくら

菅野 英余

秋の翳傷心に貼る絆創膏

大佐田うづき

日脚伸ぶ術後経過は順調と

高井 幸子

イナビカりに振り払う消せない恋

穂坂志げる

彩りの映える寄木や冬隣

片野 節子

連筆の伸の一字や秋涼し

山田 照子

日脚伸ぶ背伸びし猫ののびる影

峯尾ユキエ

枯野行く陽の当たりたる切符買う

田畑ヒロ子

もう昔焼こうよ手紙日脚伸ぶ

河本チヨ子

足袋のオブジェ歩きだしそう浜小春

須田 聡子

初冬のわが身をつつむ寺の鐘

清水美代子

末枯や物にあふれた独居なり

岡田 典代

落葉焚く煙吸いこむ青い空

松下 俊之

松手入れ終えていささか団十郎

山本 すみ

千の枝伸ばす神木冬夕焼

寶子山京子

赤棟蛇の子のしかばねの浴びてる空

大石 雄介

◆草むら(11・19)

重満報

石井 秀稀

車座はいいね私天秤座

大石 和子

カラオケの演歌熱唱帰り花

井上 和子

早々と炬燵に伸びる老いの足

岩橋恵津子

故郷は古代の想い秋来るや

佃 悦夫

ソプラノのメゾソプラノの秋深し

瀬戸 正洋

月明の修羅道を行く他は無し

佐々木重満

短日のシャッター通りの黄信号

山口 千代

◆無所属

小林永以子

冬いちご犬と未来を語る夜

柴田 礼子

日記買ふ未知の人生十年分

島 梅乃

システムの不具合鬼灯が鳴らない

杉山あけみ

ひよどりの頬の錆色海荒るる

藁宮 わか

冬風の波が馴れなれしく寄する

小澤 園子

大木犀眼裏までも黄金彩

一ノ瀬茂代

かげろふの儂き夢を釣りの餌に

小島ノブヨシ

秋ともし聞耳たてる膝の猫

砲弾へ怒りのみこむ冬の海

木村予史重